

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



の中である「年」も事実です。しかし、ある年齢をとりえ「そうあるべきだ」「こうしなければならぬ」というのも、息苦しくていけません。



この季節、手紙の締めには「よい年、良い年をお迎えください」と書くのが一般的となりていきます。相手には心からそう願っています。自分自身にとつて「良い年になる」という自信はあまりありません。来年こそ、大願成就、商売繁盛、家内安全などなど、色々な願いがかなう「良い年」であってほしいものです。

似た響きの言葉ですが、「いい年をして」となること、どうもあまり良い場面では使われませんね。「いい年をして情けない、恥ずかしい」といったマイナスのイメージが強くなります。子どもを卒業する時期は「いい年になったんだから、自分のことは自分でしなさい」「年をとるな」「いい年をして、ごじまでおごらおごらして」「いい年なんだから、早く身を固めなさい」と言われます。もうと年を重ねると「ごじ年して、ちょっと派手すぎや」「いい年して、若い女の子を追いかけて回してんじやないよ」などいわれます。年齢にいいも悪いものはない、なんとも不思議です。

「年甲斐もなへ」といふ言葉は「年齢に似合わない愚かなことをするな」といふ意

味ださうです。とすると「いい年」とは「年甲斐」のことです。「年齢相応に」とか「年齢に見合った」という感じでしょうか。誰かがその年齢相応の生き方、動き方はこうあるべきだと、枠にはめたがっているようです。

年齢相応の経験を重ねた人が、その年齢ゆえの誇りを持ち、周りがそれを尊重するのにも当然ですが、どうもそんな社会ではなくなってきたようです。長じたものは幼い者を慈しみ、幼い者は長じたものを尊敬する。という「長幼の序」の精神がなくなってきたのかもしれない。

残念ながら、年甲斐もなく大人がバカな事件を起こす世

「自分で来年こそは」〇〇をしてもいい年になった」と言えるような生き方をしたいと思えます。身の丈に合うことという条件を課したうえで、「その年齢らしさ」ではなく「自分らしさ」を追求していくことを目指します。

そのためには、多感でありたいと考えています。多感を決して若者だけの特権ではないはず。うれしい時は大いに喜び、怒る時は目いっぱい怒る。悲しい時は心から悲しみ、楽しい時は腹の底から笑う。そんな多感なおチャラを指します。

皆様も健康で、良い年をお迎えください。